

復興の最前線

第3回 [岩手県釜石市]



正面エントランス脇に設けられた「かけ下げ」で、車体に付着した塩分を洗い落とす(左)。各住戸の玄関脇には、洗った合羽を掛けておける収納スペースも確保されている(右)



花露辺町内会・会長の下村恵寿さん



ワカメ・コンブ漁など漁師歴40年以上という鳥居孝人さん。新しい自宅の窓からは直接、海を眺めることができる

地域の団結力で早期の再生を実現 「3年目の正月は自宅で」の願いに応える

住民の多くが漁業を生業とする岩手県釜石市の花露辺地区。被災からわずか4カ月で地元町内会は自ら復興計画を練り上げ、市に提案した。市からの要請を受けたUR都市機構は昨年12月、被災者のための復興公営住宅(災害公営住宅)を完成させて、「3年目の正月は自宅で過ごしたい」という地元の悲願に応えた。

写真=井上 健 取材・文=茂木俊輔

震災では津波によって、海に近い3分の1近くの家屋が全壊した。鳥居さんも被災者の1人。住宅や作業小屋などの家屋は全て津波に流されてしまった。

しかし、大地震発生時にはまず互いに助け合いながら逃げることを防災の基本に据えてきた花露辺では、当時、集落内に残っていたほとんどの住民が、高台にある、集会施設を持つ漁村センターに避難し、難を逃れた。同じ姓の親族も多く、団結力の強いこの集落では、日ごろからほぼ全ての住民が避難訓練に参加してきた。町内会長の下村恵寿さんは、「日ごろの役割分担に従って避難生活に必要な物資をかき集め、被災当日の夜8時には握り飯を配っていました」と、住民のチームワークの良さを誇る。

被災から4カ月後には、下村会長を中心に、これまで通り防潮堤に頼らない独自の復興計画をまとめ、市に提案した。津波の襲った海拔16mまでの土地を漁業用の作業場として整備するとともに、高台に避難所の機能を備えた被災者向けの本格的な住宅を建てる、という案だ。

一方、提案を受けた市は、当時まだ市全域の復旧作業に追われていて、それに対応できる体制が十分に整っていなかった。「そのため、計画実現に向けた業務を、まちづくりの経験が豊富なURにお願いしたのです」と、釜石市復興推進本部復興住宅整備室長の竹澤隆氏はその経緯を語る。

「同じ1年でも重みが違う」

UR都市機構は2012年3月、市からの要請を受けて早速、地元の描いた計画の実現に向けて作業に取り掛かる。地元から強く望まれたのが、花露辺復興住宅を2013年12月までに完成させること。下村さんは「若ければ、もう1年でも待てるが、高齢者ではそうはいかない。同じ1年でも、時間の重みが全く違う。仮設住宅などの避難先で暮らす人たちに、3年目の正月は新しい家で迎えてもらいたかった」とその思いを語る。

通常、公営住宅の建設では設計から施工を終えて完成するまで3年は掛かる。だが、地元の要望に応えるためには、1年9カ月で完成させなければならぬ。「綱

渡りをしていっているような局面が続きましたが、工事の手順を工夫するなどしてスケジュールの大幅な短縮を図りました」と、UR都市機構岩手局住宅計画チームの太田巨は安堵の表情を浮かべる。

努めたのは早さだけではない。新しい住宅には、高齢者の多い、漁業集落ならではの配慮が施されている。正面のエントランス脇には、海水の塩分まみれた軽トラックや合羽を洗ったり干したりできる、地元で「かけ下げ」と呼ぶ、屋根付きの水場を設けた。各住戸玄関脇には、洗った合羽を掛けておける収納スペース、そして高齢者への配慮としてベンチと、室内の様子をうかがえる半透明の縦長窓を設けた。

「いずれも、普段の仕事や生活について、何が必要か、住民の方々に一つひとつお話を伺い、設置しました」(UR都市機構釜石復興支援事務所・湯川進)。鳥居さんは、「漁師に必要な漁具をしまっ場所も多いし、洗面所やトイレも広い。やっと、落ち着くことができました」と語る。この集落で海と共に生きる新たな決意が湧いてきた。

花露辺の港を見下ろす新しい自宅の窓際で、鳥居孝人さんは久しぶりの海の光景に目をやる。荒れ具合によっては出漁を取りやめることもあるだけに、「居ながらにして海の様子をうかがえるのはありがたい」と話す。

被災以降の約2年半を集落から車で30分ほど離れた仮設住宅で過ごしてきた。毎朝、軽トラックで港のある花露辺まで一旦出向かないと、漁の可否を見極められない不向き。そして、ただでさえ手狭な仮設住宅の中で、高価なため外には放置しておけない漁具と暮らす窮屈さ。それらからようやく解放され、被災後3年目の正月を自宅で迎えることができた。

鳥居さんの新居は、UR都市機構が昨年12月、花露辺地区の高台に完成させた「復興公営住宅」だ。鉄筋コンクリート造りの4階建てで総戸数は13戸。漁業集落では初めての復興公営住宅である。

被災4カ月で復興計画を提案

花露辺には約70世帯が暮らし、その9割近くが漁業に従事する。半数近くは高齢者だ。東日本大



高齢者への配慮から、玄関の内と外にベンチを、また住戸内の様子を外からうかがうことができる「見守り」用の窓を設けている



釜石市復興推進本部復興住宅整備室長竹澤隆氏

釜石市におけるUR都市機構の復興まちづくり支援

復興市街地整備	地区名	面積
	片岸	23ha
	鶴住居	60ha
	花露辺	2ha

※面積は事業計画等の面積を表す(小数点以下四捨五入)

復興公営住宅整備	地区名	戸数
	花露辺	13戸
	東部(大町1号)	65戸

※戸数は計画戸数を表す 2014年2月1日時点